わび茶と露地(茶庭)の変遷に関する史的考察(6)

石州・不昧における露地の展開

誌名	千葉大学園芸学部学術報告
ISSN	00693227
著者名	浅野,二郎 仲,隆裕 藤井,英二郎
発行元	千葉大学園芸学部
巻/号	43号
巻号補足	
掲載ページ	p. 157-168
発行年月	1990年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

千葉大園学報（Tech. Bull. Fac. Hort. Chiba. Univ.）
第43号 157—168（1990）

わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察
—その6：石州・不昧における露地の展開

浅野二郎*・仲　隆裕**・藤井英二郎***
（*千葉大学名誉教授，**京都市文化財保護課，***環境植栽学研究室）

A Historical Consideration on the Changes of the Wabicha (Tea Ceremony) and the Roji (Tea Garden)—Part 6 : The Development of Tea Garden by Katagiri Sekishu and Matsudaira Fumai

Jiro ASANO*, Takahiro Naka**, Eijiro Fujii**
(*Emeritus Professor of Chiba University, **Cultural Properties Protection Section of Kyoto City, ***Laboratory of Planting Design)

ABSTRACT

We analysed the relationships between the tea garden and the shoin style garden of Jikoin which Sekishu constructed late in his life. We also analysed the tea garden of Kandenan or the tea house and the shoin style garden of Kogetsutei of the villa of Kanden, which Fumai would have planned, and indicated the harmonious collaboration between them in more progressed style than in Jikoin. Finally, we pointed out the close relationships among the garden of Jikoin and the villa of Kandenan, and the garden of Bosen of Kobori Enshu.

1. 研究の課題

前報その5[1]では，織部・遠州によって成し遂げられた茶座敷と書院との連繋についてとりあげ，これに果たした鎖の間の役割について述べた．

而して，このことは同時に茶庭と書院の庭との連繋にかかわる問題を含んでいるものととらえ，そのすぐれた作例の一つに大徳寺塔頭孤篷庵・忘筌の庭を挙げた．それは忘筌の庭が露地と書院の庭との有機的一体として成立していることが指摘できる[2][3]ことによる．例えば，それは蹲踞の鉢前構成が同時に，縁先手水鉢の鉢前構成としてもはたらいているところに見られる．

やがて，この忘筌の庭の造形が，さらに発展・展開する時期を迎える．この論文では，この時期における作例のなかから片桐石州の慈光院の庭と，松平不昧の向月亭および菅田庵の庭をとりあげ，考察する．

2. 石州の茶と茶庭

(1) 片桐石州の茶

片桐石州（慶長10年～延宝元年：1605～1673）は名を長三郎貞俊，のち貞昌といい，寛永元年（1624）石見守に任ぜられたので石州と通称される．寛永15年（1638）には大徳寺に高林庵を創建し，その開山，玉室から三叔宗関の号をうけた．

石州は，道安門下の桑山左近に茶を学んだ．

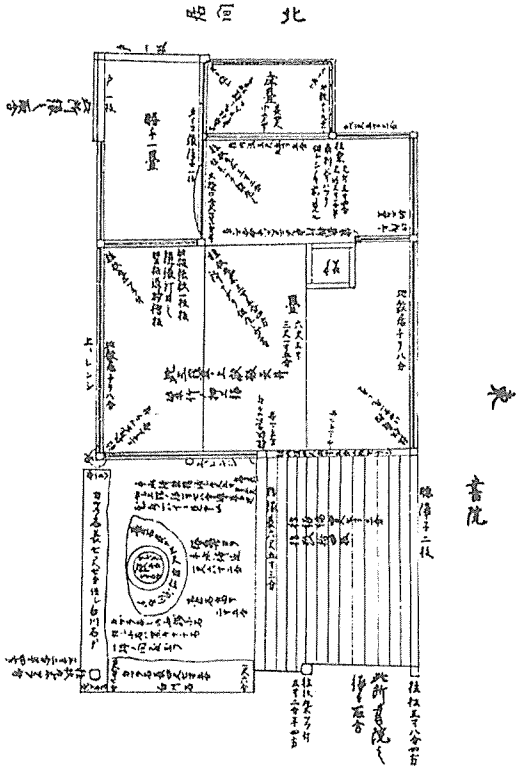
松平不昧の『茶事覚書』に「茶の湯の法は宗関どの」という言葉がみられるように，石州は深く茶を学んだようで，山上宗二記に註を附したり，また実山が世に出す以前に南方録を所持していたという[4]．

寛文5年（1665）には，江戸城黒書院の囲で，四代将軍家綱に茶を献じるまでになり，また遠州亡きあと将軍家の茶道指南の役をつとめるなど茶匠として大成をみるに到る．即ち，当時，石州は武家茶匠として，遠州の後継者ともみなされる位置にあった．彼の茶について考えるとき，『宗関公自筆案詞』[5]にみられる「茶の湯さびたるは吉，さばしたるは悪敷」という一句が参考になる．

寛永4年(1627)，父貞隆の没後，石州は封を継いで大和小泉1万6千4百石の領主となる．寛永11年（1634）正月17日，石州は小泉に松屋久重らを招き，自会としては初めての茶会を催している．松屋会記[6]によると，この時の茶室は「平三畳カコイ　ムロ床　真ノカマチ」であった．この佗びた室床と真の塗框のとりあわせについて，中村は「佗びを深く志向する態度と，同時に武家的な感覚をもそこに保とうとする態度とが合併された表現」とみている[7]．このことから，石州の茶は草庵の茶と，大名的な華やかさとをあわせもつ茶を目指しており，このような彼の茶に対する考え方が茶室や茶庭の構成においてもあらわれていたとみてよいであろう．

（2）　石州の茶庭

京都綾小路の石州の屋敷には，四畳敷の茶室があった[8]と伝えられる．これは，三畳敷に突上げ窓をあけた掛込天井の一畳，つまり相伴席ともいえる客座を添えた形であり，点前座は一畳，中柱をたて，炉は上げ台目切であった．床は点前座の勝手付に設けられる，いわゆる亭主床であった．席入は縁伝いに行われたようで，縁でつながれる書院には刀掛けが設けられていた．ここで注目されることは，縁先に設けられた手水鉢の構成である．この縁先手水鉢の鉢前構成は，二方を白川石の葛石で限り，その内を一面に「黒キナチ石」即ち黒い那智石で敷きつめており，中央の根府川石の台石の上に水鉢が置かれていた(第1図参照)．栗石を敷きつめた中に手水鉢を配して景を演出する手法は，かつて織部が本圀寺方丈で試みた手法であり，またさらに，これを遠州が閑雲軒の待合や忘筌で発展させたものであった[9]．石州が「京都柳之馬場綾小路御抱屋舗」において試みた鉢前構成の手法は，この織部・遠州の手法を継承するものとみてよいであろう．すでに前報において検討したように，遠州が閑雲軒の露地をつくったのは寛永9年（1634）のこととみられる．そして，さらに忘筌の露地へとこれを展開するのが，ほぼ寛永20年（1643）ごろのことであった．ところで，石州は寛永10年（1633）知恩院の普請奉行として上洛，同18年(1641)まで綾小路に滞在することになる．中村によれば，上述の茶室はこの京都滞在中の作とみられるとしている[10]．



第1図　石州の京都柳之馬場綾小路御抱屋敷の茶室
（堀口捨己；茶室研究より）

寛永14年（1637）4月2日，石州は伏見における遠州の茶会に正客として招かれている．また寛永18年(1641)正月には8日と10日の2日にわたって松屋久重と共に遠州の茶会に招かれている[11]．

遠州が織部から受けついだこの露地の鉢前構成を発展させてゆく寛永9年から同20年の時期，わび茶の修業期にあった若き石州は遠州とのこのような交流のなかから多くのことを学び，その成果を自宅の茶室や露地の空間構成のうえに反映させていったとみることができる．

（3）　慈光院の書院とその庭

石州はその晩年，両親の菩提を弔うため明応禅師を開基に迎え，大和小泉に慈光院を創建した．しかし，この慈光院はその後ほどなく，更に眺めのよい現在地をえらび，改め造られたことが明応禅師玉舟の頌[12]によって知られる．

この慈光院の大きな特徴のひとつは，その立地にある．現在の大和郡山市の西部にあるこの地は大和平野のなかの独立小丘の頂部で，玉舟の頌にも〝残剰之奇観〟あるいは〝簷外夕陽皆是花〟の句がみられるように丘上からの眺めはまことに絶佳というべきところであった．

慈光院の書院（客殿）は多くの禅院方丈とは全く異なる間取りをもつ．即ち，この書院は現在，6部屋から成り，もっとも東寄りにある十三畳の間には床，付書院があって，この書院のもっとも要な座敷である．この十三畳の間からは，東にひらける大和平野とその先に春日連山とが遠望され，この庭の大切な見所のひとつとなっている（写真1参照）．

十三畳の間の付書院は，その地袋の板壁がすべて取りはずしになっており，床前からの東の眺望に対してまことによい明度の調和をとることが出来るようになっていて，それは，桂離宮新御殿の付書院の在り方に通うものを感じさせる．堀口[13]によれば，この付書院は他の部材にくらべ古い材から成り，おそらく石州が他から移したものであろう，としている．このことは，石州が好ましいものとしてみた付書院を，ここに移したことの証になっているといえるかも知れず，その意味で，石州の好みの一端を，企まずしてここに見ることが出来るといえよう．

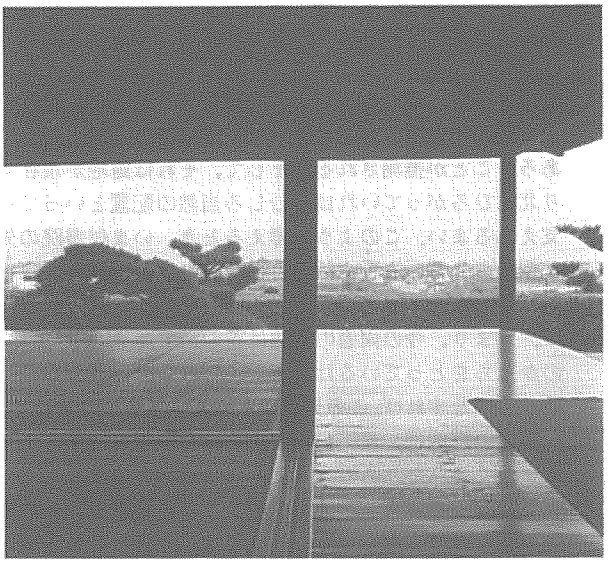
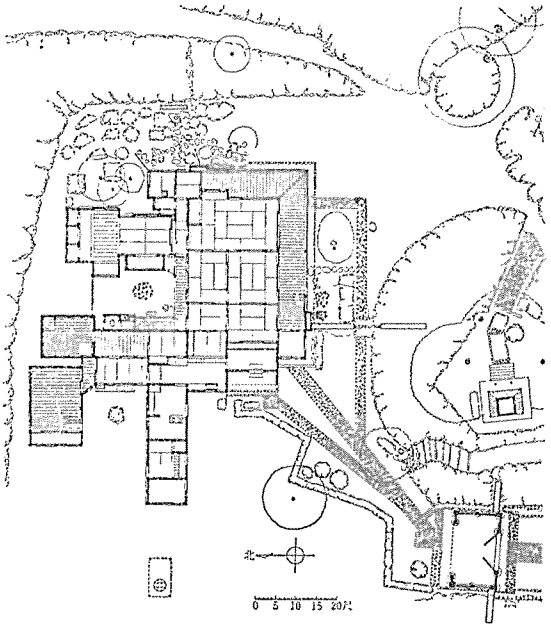


写真１　慈光院書院座敷からの眺望（昭和 63 年撮影）



第２図　慈光院平面図（堀口捨己：草庭より）

付書院の先は，この書院座敷の南，東を矩折れに囲う広縁になっており，この広縁が書院座敷に広さとともに一種の格調をもつくり出している．広縁の先には白砂敷きの広い平庭が展開する．

慈光院の庭園は，茨木城楼門と玄関を結ぶ長い延段を中心とする前庭と，庭門から東，書院座敷の前面に展開する主庭とに大別されるが，ここでは前庭をしばらく措き，主庭について検討する（第２図参照）．

この主庭はすでに触れたように，広縁の先に展開する広い白砂敷きがその中心である．この主庭で人目を惹くものは，云うまでもなく庭の東に展開する春日連山の借景（写真１参照）であるが，もうひとつ取りあげるべきは主庭の西を限る庭門をとおして，前庭から真っ直ぐにつづく延段である（写真２参照）．この延段は白砂敷きの中を広縁に並行に直進し，やがて十三畳の間の東端（広縁の東端ではない）で，きっぱりと矩折れして，座敷前に据わる沓脱石に達する．

この延段のただずまいを見るとき，すでに筆者らが造園雑誌において吟味した[14]織部が京都・本圀寺に好んだと伝える書院の庭で見た，飛石のすがたを想起する．即ち，そこでは飛石を直線状にきっぱりと打ちながら，しかも単調に堕さない庭づくりを果していた．ただしかし，織部のそれは飛石という〝点〟を以ってする構成であった．それに対し，石州のこれは延段という〝線あるいは帯〟を以ってする，より明確な直線への指向であり，空間を分つ指向であるといえる．そして，ここには織部の茶碗[15]がもつ漸新な暖かさを感じさせる織部独自の意匠と，石州の茶杓[16]がもつ素直で明快な石州の意匠を支える意識の相違をも同時に見て取ることができる．

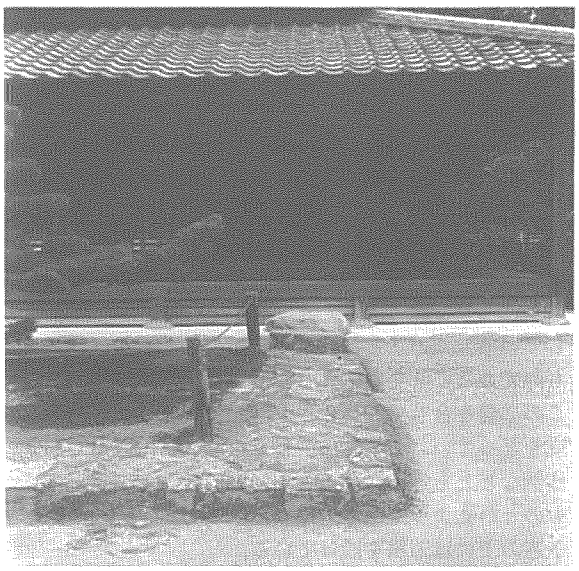


写真２　慈光院庭園の延段（昭和 63 年撮影）

書院座敷の東側は削平された台地の先が，やがて慈光院蓮池につながる急な下り勾配となっている．この勾配の肩を覆うようにして高さを押えた大刈込みが平庭の先

に展開し，遙かにひろがる春日連山を見事にとらえている．

さて，書院座敷前面，延段の奥はもとの山が残されていて，正面やや西寄りからその上り勾配がはじまる．この山が延段の明快な直線とともに一庭を引きしめる築山の役割を果し，また同時に東の眺望を受け止める役割をも果している．

而して，このような慈光院庭園の構成は，刈込みの高さが造成当時にくらべ高くなり，また築山背後の松の数が多くなり，その大きさも増して，背後の見透しをさまたげるなどしているであろう．けれども庭園構成の基本において，おそらく石州の時代とそれほど大きく変るものではないと考える．

（4） 慈光院の茶室と露地

石州は寛文11年（1671），慈光院に茶室を建てる．天明3年（1783）の記録[17]によれば茶室は二畳台目で，書院の広縁を待合とするものであった．この茶室は今日に伝えられるもので，書院座敷の北に設けられた半間巾の縁側の東端に位置する茶室である．縁側の西端には踏込み床をもつ三畳座敷がこれに相対している．この三畳座敷の縁先にはまことに好ましい手水鉢が配されており，中村はこの三畳座敷にも石州らしい好みがみられる[18]としている．おそらく，二畳台目の本席に対し，これは寄付に用いられたものかも知れないが，この検討は他の機会にゆずる．

さて，本席は二畳台目，櫟の皮付中柱，炉は台目切，床は下座床という構成で，さらに客座の南には二畳の控間を付けている．ただ，二畳の控間について，中村は後世の改造によるもの[19]としている．しかし，堀口は控間の中敷居には墨書があり，この墨書からこの茶室を片桐家が代々よく保ち，長く遺してきたものとみられる[20]としている．このことは控間が石州の当初から付けられたものであることを意味する．従って，本席は当初から，この二畳を合せて四畳台目として用いることも出来る構成をとっていたとされる．おそらく，石州の他の茶室の作例などとも考え合せるとき，堀口のこの推定は正しいものといえよう．茶室の東には躙口をあけ，その南の連子窓の下には刀掛を設けている．

ところで，堀口[21]は現在の茶室が寛文11年の当時からみて少しく南に移されたのではないかとしている．つまり，慈光院の建物を仔細に調べた結果から，当初は今の広縁がさらに北に延びていて，今の控間あたりが待合に使われた場所であったかも知れないとの推測を下している．この指摘は露地の構成を検討する上で極めて重要であり，注目に価する．

いま，この堀口の指摘がもし正しいとすれば，茶室に対応する露地は現在よりもさらに北にひろがっていた可能性が生ずるであろう．また，このことと深くかかわるものとして，躙口が現在より北に寄ることから，蹲踞もまた現在の位置より北に寄った位置に構えられていたであろうことが推測される．そして，それは露地が現在より北にひろがっていれば，むしろ当然の配置といって差支えあるまい．このように考えるとき，いま付書院の先に据えられている手水鉢とこの蹲踞の位置関係も，はるかに好い配りをみることができるようになるはずである．つまり，今の両者の配置は茶の湯で疎まれる〝重複〟のかたちをとっているけれども，もしこのような推測が成り立つとすれば，この欠点は自ら氷解することになる．

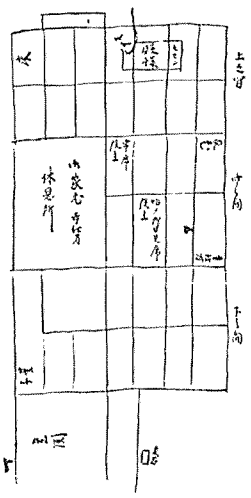
本席の露地は，書院からのすぐれた眺望をとらえるためにつくられた，あの大刈込みにつづくもので，ここでは春日連山の眺望を敢えて遮るように築地塀を，その東から北にかけて廻していた．それは，今日もなお露地の一部にわずかに潰え残る築地塀の姿から推測することができる．即ち，石州はこの露地において「客ノ目ウツラヌカヨシ」とする草庵わび茶の庭を，絶佳の眺望をさえ惜しみなく切り捨てて，そこに創出した．

この露地とその南につらなる書院の庭とは，いまは二畳の控間の外に取付けられた袖垣によって仕切られているが，おそらく石州の当時は竹垣かあるいは生垣によって境されていたものであろう．ともあれ，客は伝記に誌すように広縁を待合とし，広縁から飛石づたいに露地門（あるいは木戸）を通り，蹲踞へとみちびかれ，やがて席入りするというかたちをとったはずである．つまり，石州は書院座敷の庭をも茶の所作の場に含めるかたちで活しながら，〝客をもてなす道理を本意とする〟茶の湯の場を，より豊かな変化ある空間として構成した，とみたい．

石州における露地と書院座敷とのこの連繋をみるとき，孤篷庵・忘筌の露地において果した遠州の構成手法[22]に想い到る．

もとより，石州が慈光院の露地において果したこの構成手法は遠州が忘筌の露地においてはじめて到達した構成手法と同列のものでないことは云うを俟たない．しかし，これは遠州に親炙し，遠州が探究しつづけた〝茶のための空間構成の原理〟がもつ意味が奈辺にあるかを学んだ石州においてはじめて成し得た構成であることもまた確かなことであろう．

石州がこの二畳台目の茶室を，また十三畳の間即ち書院座敷をどのように使ったかを知る資料は未だ管見に入っていない．しかし，前述するように石州は京都屋敷に営んだ四畳半前欠と呼ぶ茶室では，茶室と廊下で結んだ書院に刀掛けを設けていた（第1図参照）から，この慈



第3図　慈光院書院の間取り古図（安政3年）
（堀口捨己：草庭より）

光院の茶の湯の席においても，書院座敷を茶のもてなしの場としてかなり重く見ていたとしてよいのではあるまいか．いま，十三畳の間の構成を見ると，この座敷の床はいわゆる「出床」の形式をとり，その東に付書院が配されている．床を挟んで，この付書院の反対側には畳一枚が敷かれ，二枚襖で茶室に通じる縁側になっている．この構成は付書院を除けば忘筌のそれに類似する．忘筌の場合，床わきで点前が行われるが，ここでは炉が切られていないので点前ではなく，古式に則る点茶かあるいは台子による茶立てなどの類が行われたのであるまいか．後代のものではあるが，天保13年（1842）の主膳様御初入記録に残る図（第3図参照）には書院（客殿）の玄関寄りに「台子」の書き込みがあることから，そのようにも考えられる．

つまり，書院座敷では格式を重んじる点茶，茶立てが行われ，二畳台目の茶室ではわびに徹した茶が行われたとみる．それは，当時広く行われた鎖の間を併せた茶の湯とはひと味ちがった茶のもてなしの在り方がそこにはあったということになる．この二つの場で行われた茶の在り方の取り合せまでを含めたなかで，慈光院における露地と書院座敷の庭とのつながりを考えるとき，石州が慈光院において目指したものが，あるいは見えてくるのではあるまいか．

3．不昧の茶庭

（1）菅田山荘

菅田山荘は松江市の西，菅田町の起伏が続く丘陵地の一角にあって，広大な地を占める．

山荘は松江藩家老職，有沢家初代織部直玄が藩主直政より「御茶屋並ニ多クノ土地」を拝領したことに創まると伝えられる[23]が，この山荘が今日見るような山荘に改まるのは有沢家6代の当主弐善の時で，それは不昧の時代に当る．

寛政3年(1791)11月25日，不昧は江戸より弟衍親(瓢庵)とともに松江に帰る．翌寛政4年（1792）2月28日菅田村の山荘を訪ねる．不昧にとって菅田山荘(山屋舗)の訪問はこれがはじめてであったことが，有沢家に伝えられる小林如泥作の煙草盆の箱書に「寛政四壬子二月二十八日山屋舗へ始而御成之節御待合へ差出之」[24]とあることによって知れる．

不昧がこの山荘の庭の地割，建物の配置などのいわゆる全体計画を樹てるのは，この山屋舗の訪問を契機とするものであった．

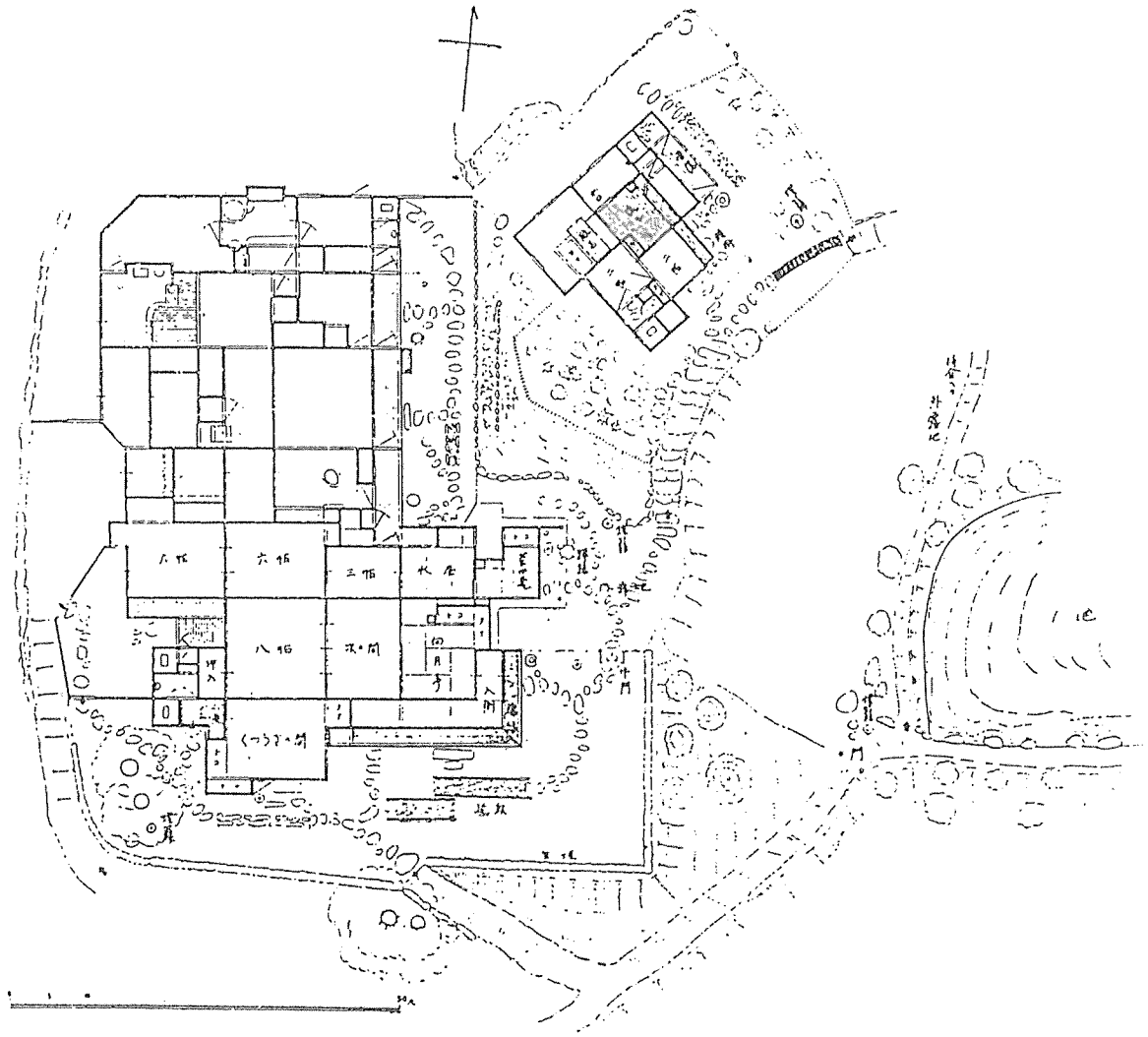
有沢家8代の当主弐審が，家代々語り継いできた山荘の由来を書き誌るした「由緒書」[25]（慶応2年）によって，この山荘の整備された事情がわかる．それによれば，不昧がこの土地の状況にもとづいて自ら総絵図をつくり，「大役モノ」に開地をさせたという．これによって，「切通シ」や「萩ノ台」も同時に造成され，また御譜請方によって建物・庭園などが出来したことが解る．なお，同書は「向月亭の庭は瓢庵公御好なり」と書き添えてあり，あるいは不昧の計画（総絵図）をふまえながら弟衍親（瓢庵）が細部設計に当ったのかも知れない．ただ，ここで重要な点は，不昧の総絵図（計画）が基本にあった事を等閑視してはならないという点である（第4図参照）．

（2）菅田庵の茶室と露地

菅田山荘の茶室菅田庵は一畳台目に中板を入れ，中柱に隅炉を切り，床は洞床という構えであるが，仔細にみると，そこには茶室の構成の定石を超えた独自の好みが込められた茶室[26]といえる．ただ，この菅田庵でみられる最も大きな特徴は，御茶室に付帯して御風呂屋が設けられている点である．御風呂屋は，菅田庵の露地につづく東北の高みに位置し，建物は深い土庇をもつ茅葺きで蒸風呂と寄付，腰掛などから成り，菅田庵のための待合の役割をもつ（第5図参照）．

客は楓の馬場を通り，由緒書にある，あの萩の台を右手に見ながら池べりに沿って，御風呂屋に通じるゆるい坂道を登る．坂を登りきったところに御風呂屋がある．つまり，ここ菅田庵では，客はまず汗を流し，気分をあらためて，茶室に入るという趣向である．

ところで，この茶と風呂を組み合せる趣向は決して不昧にはじまるものではなく，むしろ中世にまで遡るもの



第4図　菅田庵・向月亭平面図（岡田孝男：茶室行脚より）

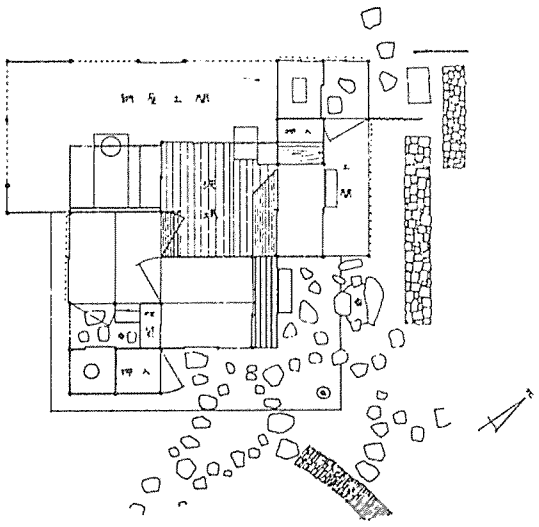
とされる．勿論，中世において風呂と組み合せられる茶は佗び茶ではない．ただ風呂は古来，人々の好んだものであり，そこに客をもてなす趣向として風呂をとりあげるきっかけがあった．

それは「老人雑話」に利休七哲のひとり蒲生氏郷が諸士を饗するために自ら風呂の火をたいて歓待したとあること[27]からも，かつて風呂が客のもてなしとして用いられたことがわかる．またあるいは，中世に淋間茶湯[28]と呼んで風呂と茶を組み合せた客の接待の趣向がひろく行われたことなどからも，不昧の趣向の発端をみることができる．

もっとも，利休はこの風呂と茶を組み合せたもてなしの趣向を否定した．しかし，この淋間茶湯の好みを換骨奪胎し，茶道具の好み――木地の釣瓶水指や木地の曲物，青竹の蓋置など――の中にその風情を活かした，とされる．

江戸の庶民の中では風呂屋の普及する中で，風呂屋で風呂上りに駄菓子と渋茶をたのしむ人々のすがた[29]を見ることができたが，それはおそらく淋間茶湯の心が庶民の中に姿をかえながらも根強く生きていたといってよいであろう．

不昧は，その当時，庶民が楽しんだこの風呂と茶の取り合せを茶の世界に取り入れるという工夫のうえに立って，このような趣向をとったのかも知れない．それは彼



第5図　菅田庵の御風呂屋
（中村昌生：菅田庵と向月亭，仏教芸術60より）

がひとつの侘び茶の流派にこだわらぬと同時に点前の細部にこだわらぬ，大らかな茶を好んだことと決して無縁のものではなかったと考えるからである．

御風呂屋から石段をおりれば，そこは菅田庵の露地である．露地は南を高い建仁寺垣で，また東は高い植え込みで殊更に眺望を遮り，御風呂屋からの眺望とは全く別の世界をつくり出していた．狭い平坦なこの露地には小ぶりの石を用いた飛石が打たれ，客を躙口に導く（写真3参照）．

菅田庵は丸味をもつ厚い茅葺きの入母屋造りで，その破風に楽山焼の円い陶額を掲げる（写真4参照）．妻には柿葺きの庇を付け，庇の屋根裏は化粧屋根裏としていて，蹲踞をこの庇の軒内から遣う構えをとっている．

この露地は，当時盛行した贅と華美の露地と異なり，限られた数少い庭木を配植するだけの平庭である．露地を飾る要のひとつである蹲踞構えでさえ，まことに控え目で，その素材も質素というべきものといえる．それは現存する軒内のつくばいの作例，たとえば西本願寺黒書院茶室の作例あるいは大徳寺真珠庵・庭玉軒の作例をと



写真3　菅田庵の露地（昭和32年撮影）

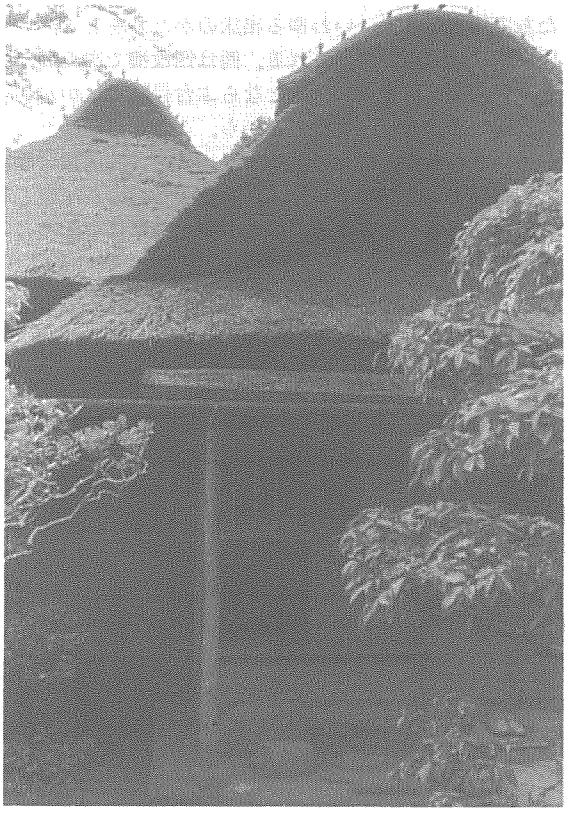


写真4　菅田庵とその露地（昭和32年撮影）

ってみても，よく理解できる．

すでに触れた如く，この蹲踞は軒内遣いのかたちをとるが，それは決して奇をてらうものではなく，雪深いこの地方での在り方として，まさに用に即した意匠といえる．

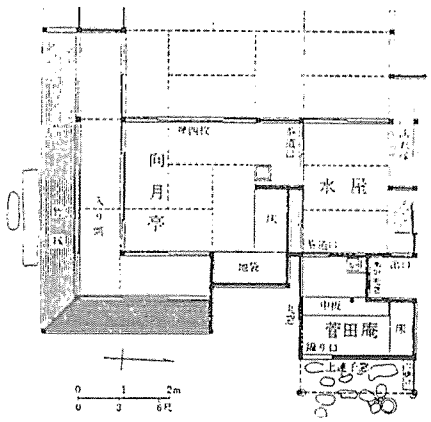
飛石は全体として小ぶりながら，要所に配される役石は，それぞれ在るべきところにあって，飛石全体がつくり出す抑揚がこの露地を内露地としてのあるべき姿につくり出している．その意味で，この飛石は菅田庵の露地の大切な見所といえる．

（3） 向月亭とその庭

向月亭はこの山荘の中心をなす建物であり，寄棟造り茅葺で，その東から南にかけて柿葺の庇をまわした，いわば田舎屋風ともいえる軽やかな建物である．この向月亭の北東端には入母屋屋根をつき出すかたちで茶室菅田庵が設けられている．

向月亭の主座敷ともいうべき書院座敷は，この菅田庵の水屋の南に接して配置されている．従って，菅田庵の三畳の水屋は，この書院座敷の水屋ともなり得る．

書院座敷は四畳半台目．台目巾の床は台目畳と並ぶかたちで構えられる，いわゆる出床のかたちをとる．この床の東には付書院が配される．西は四枚襖で次の間，即ち八畳の次室に接する．床とならぶ台目畳には炉が切られ，二枚襖で水屋とつながるから，ここが点前座としても用いられることになる．つまり，この書院座敷は単に上段の間というだけではなく，四畳半台目の茶座敷としても用いうることになる．座敷の南と東には半間巾の入側（畳縁）が回り，さらにその外に半間巾の簀の子縁（落縁）が回っている．入側と落縁には特に腰の低い明障子が建てられているため室内は明るく，障子をあけ放てば，ただちに七畳台目の広座敷ともなる（第6図参照）．



第6図　向月亭・菅田庵平面図
（図説茶道大系第4巻より）

たしかに，茶室でも縁をつけることがある．しかしその場合，それは落縁だけで向月亭の場合のように入側と落縁をつけることは，まずない[30]．即ち，入側と落縁をつけるのは書院の場合に限られてるといってよく，この向月亭の主座敷が四畳半台目の茶座敷でありながら一種の格調ともいえるものを感じさせるのも，あるいはこの辺に由来するのかも知れない．

つまり，この向月亭の主座敷は茶の座敷であると同時に，次の間を従えた書院上段の間としての性格を併せもつものであるといえる．それは，一面において書院がもつ伝統の格調を保ちながら，反面，社会的な地位を超え，一碗の茶を共に啜る“わび茶”が育て，洗練してきた“うるおい”と“やすらぎ”，そしてそこに生まれた“開放感”を併せもつ座敷となっている．このように見るとき，この向月亭は，いわば真の意味での数寄屋造りといってよい建物であるといえる．

向月亭の庭は，この書院座敷の前面，南から東にわたって展開する．その先はかなりの降り勾配となる．その斜面の肩を覆うようにして，さつきを低く刈り込んだ生垣が庭を限るようにしてひろがる．ここからは西方はるかに松江城を望み，眼下には田園の中を流れる新川を望むことができる．またここは月のころには東の松林から昇る月の風情を楽しむに格好の場所でもある．おそらく，向月亭の名もこの辺に由来するのかも知れない．

庭は低い刈込み垣で南を限る平庭で，そのいかにもひろびろとした敷き砂のなかには飛石と延段が布置される．この砂敷きの平地は飛石と延段によって，巧みに分割されながら，ひとつの庭空間として見事なまとまりをつくり出している（写真5参照）．

向月亭の書院座敷の前をよぎるようにして延びるこの延段は，その両側を太い丸竹で挟む．一般に，延段を縁どる場合，葛石などが用いられるが，ここではそれに代えて，他には見られぬ丸竹を用いている．それは，おそらく向月亭において正式の行事が催される場合，かつては，どこでも新年を迎えるに当って，露地の竹垣を清々しい青竹に改めてきたように，この丸竹を青竹に替えて客を迎えたものであろう．

座敷の南に設けられた落縁が，この座敷と庭をつなぐ役割を果す．この場合，選り抜きの細竹を長手につめ張りした落縁のこの細竹と延段を縁どる丸竹が並行に布置される（写真6参照）ことによって，この落縁の果す役割とその効果を一層強いものにしている．さらに，この延段は落縁（簀の子縁）と並行に配置され，座敷の正面



写真5　向月亭の庭（昭和32年撮影）

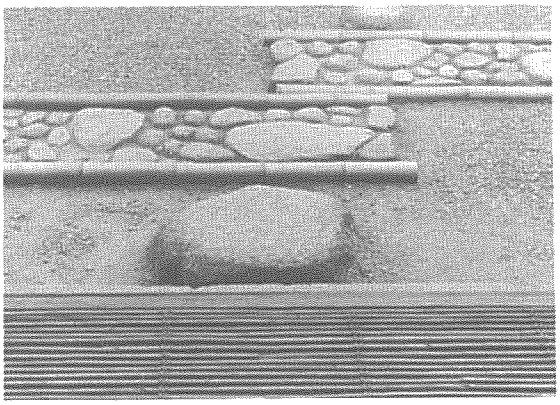


写真6　向月亭書院座敷の簀の子縁と延段
（昭和32年撮影）

にすわる，きっぱりとした切石の沓脱石と自然石・一石で連なる．落縁の細竹は釘止めではなく，籐で美しく編み止めされていて，そこに座敷と庭をつなぐ役割を果すこの落縁に込められた心くばりのほどがよく読みとれる（写真6参照）．

この庭は母屋向月亭に付属する茶室菅田庵の内露地に対して，外露地としての役割をも同時にもつ．菅田庵の露地にみちびかれるようにして，伝い石をつたってゆくとき，そこには向月亭の座敷に座って見る庭とはまた別種の美しさを見る者に感じさせる．それは庭園鑑賞の視点を一ヵ所に限る書院の庭と異なり，ここには視点の移動がむしろ積極的に期待されるなかで庭園が鑑賞され，庭空間が活かし用いられる“よさ”がある．つまりそれは，庭園を鑑賞の客体としてのみとらえる姿勢から，観る者自身が庭空間に立ち入ることによって，はじめて庭園鑑賞を完成させるとする，そのような姿勢への転換がこの庭にはあるといってよいであろう．この庭をこのようにとらえるとき，それは座観の“静”から伝い石を歩く“動”的鑑賞への転換をさりげなくなし遂げた庭といえよう．

向月亭の庭における造庭の理念をこのようにとらえるとき，用の庭としての露地と向月亭の庭とが極く自然に一体化の道を辿ったこともまた当然といわねばならない．そして，さらに，もし由緒書が伝えるように向月亭のこの庭が瓢庵の設計に成るものとすれば，この設計者をこのような構成の域にまで到着せしめたプランナー不昧の計画者としての力量をも同時に評価せねばならないものと考える．

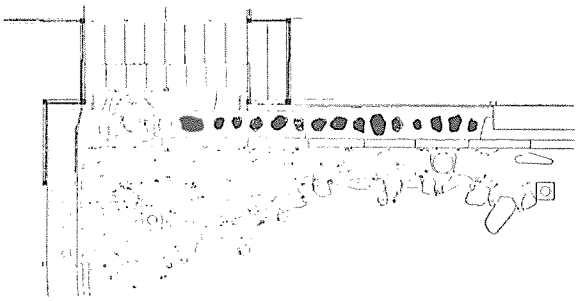
4．まとめ

以上，石州の好み建てた慈光院書院（客殿）の庭と二畳台目の茶室の露地，それに不昧の好んだ向月亭の庭と菅田庵の露地について述べてきた．

ここでは，理念において利休の茶を目指しながらも，茶に関する具体的な造形のうえでは，直接　遠州の影響を受けたとみられる石州の晩年の作として今日に伝えられる慈光院の作列をとりあげる．また，石州の茶の流れを汲みながら，同時に遠州の造形に対する識見を高く評価した不昧がかかわった作例として，今日もなおよくその姿を伝える菅田山荘の庭をとりあげ，これらの作例をとおして，石州と不昧における露地の展開の手法について考える．

この場合，両者に深い係わりをもつ遠州の造庭を同時に見る必要があり，ここではすでに前報[31]で述べた遠州好み孤篷庵・忘筌の露地を併せ考える．而して，これらの検討・考察では，特に飛石と延段をその中心に据えて論ずることとする．

忘筌の露地において，飛石は客殿の軒下，つまり犬走りの中に一直線状に打たれていた（第7図a参照）．したがって，飛石は「待合」に用いられる檀那之間の広縁からは客の目に入らず，ここからは客殿のための庭のみが客の目に映ることになる．しかし，一旦「待合」から出て，露地の空間として用意された犬走りに立ったとき，そこにはじめて露地のための飛石が明確に示されることになる．客の視線は直線状の飛石に導かれ，やがて蹲踞構えへと収斂してゆく．つまり，忘筌の露地において飛石の打たれる空間は忘筌の露地としての空間と客殿の庭

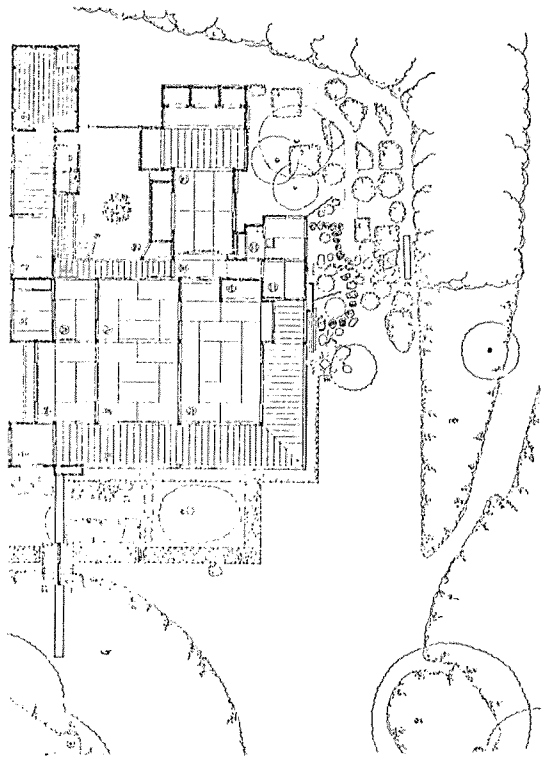


第7図　（a）　大徳寺塔頭孤篷庵・忘筌の露地
（堀口捨己：茶室研究より）

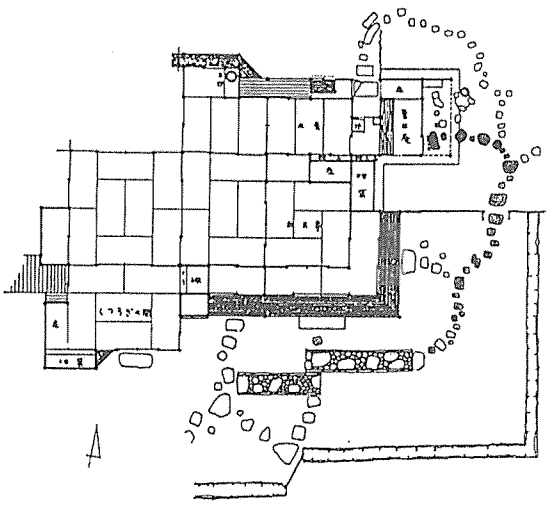
としての空間の“はざま”にあるといえる．あるいはまた，その両者の“重層の空間”の中にあるともいえよう．それは“はざま”あるいは“重層の空間”などと言葉のうえで表現することは容易であっても，そこに在る実体が意味するものは極めて重いものであり，その故にこそ，これが“遠州の絶妙な造形”と評価される所以のものといえよう．この絶妙な露地の空間構成に対応するものとして，遠州は広間の茶室とは異なる茶の空間，忘筌を創出した．それは佗茶の空間としての茶室に格調を重んじる書院座敷の性格を重ね合せた室内空間の成り立ちであった．それが云うところの忘筌であるとみる．

若い時代，遠州に親炙した石州は晩年慈光院を創る．そこでは遠州が創出した忘筌がもつ空間的特性にまなびつつ，茶のための空間を書院座敷と二畳台目茶室に分離配置しながら，これに対応する外部空間として書院の庭と茶室の露地を連携するという独自の手法を以って，新たな空間構成を創出した．これは，当時盛行した茶室→鎖の間→書院という茶の湯の場の展開とは異って，茶の湯の場の展開の中に書院の庭を正しく位置づけようとするものであったといえる．而して，石州の庭に対するこの理念は，書院の庭に対するその後の新しい理念への展開にとって大きな意義をもつものであったといえる．但し，ここでは書院の庭のためのあの延段と露地に向う飛石とは，まだ直接連携してはいない(第7図b参照)．それは，この庭が書院の庭を“観る庭”としてとらえてきたそれまでの観念を超える石州の庭づくりに支えられたものではあったが，しかしまだ，用いる庭として完全に把握されるまでには到っていなかったことを同時に示しているといってよいであろう．

石州の茶の流れを汲む不昧は，しかし，同時に遠州に私淑した．特に遠州の造形の卓越性を評価し，そこに学ぶところが多かった．それは孤篷庵の焼亡を深く惜しみ，



第7図　（b）　慈光院の露地（堀口捨己：茶室研究より）



第7図　（c）　菅田庵の露地（中村晶生：茶の建築より）

註：第7図a，b，cで黒塗りの飛石・延段は本文の理解に便するため黒塗りとしたものである．

寰海老師を助けて孤篷庵の復元を成功させたことにも見られよう．

この不昧が好んだ菅田庵の露地と向月亭の庭をみるとき，そこには露地と書院の庭とが深くかかわって全き一体となっている姿が見られる（第7図C参照）．向月亭の庭は〝観る庭〟であると同時に歩き楽しむ〝用の庭〟といってよい．即ち，ここでは飛石・延段のたたずまいの美しさが鑑賞の対象であるとともに，それを踏む歓びが同時に期待される．而して，向月亭の庭の飛石と延段の見事さは，このような視点に立っての見事さであった．

向月亭の構成は，茶における小間の構成原理を改編し数寄屋化したもの[32]とされ，すでに述べた如く，まことの教寄屋造りといってよいものであろう．また中村がいうように，茶室・菅田庵も向月亭もそれはひと続きに使われるべき山荘の主建築である[33]．この山荘の庭をこのような建築の特性に対応するものとしてとらえるとき，それが露地と書院の庭との出合いを全きものとし，自らなる連携が達成される契機として働く，と考えたい．

これまで，わび茶を中核に，さまざまな意味で深いかかわりをもった遠州，石州，不昧らの露地について述べた．これら3人の作例がもつ露地の構成の特性をみるとき，それらはいずれも，その基本において書院座敷の庭を露地の機能を展開する場としてとらえる点で共通する．しかし，その展開の手法において，それぞれその在り方を異にしていた．そして，それは飛石の配置に象徴的にみられる．

孤篷庵のそれは書院座敷の庭と忘筌の露地とが明確には区分されず，相互に重層するかたちで構成される．しかし，その用法によって，あるいは書院座敷の庭として，あるいは全き露地として働く空間構成をとっていた．慈光院では書院座敷の庭と露地とが明確に区分されるなかで，露地の機能を補完する空間として，書院座敷の庭の一部が用いられる構成をとっていた．菅田山荘の場合，書院座敷の庭と露地が区分される点で慈光院の場合と等しいが，しかし，ここでは書院座敷の庭がそのまま菅田庵の外露地として機能する構成をとる．さらにいえば，孤篷庵では空間構成すなわち形のうえでの重層構造をとっていたが，ここでは機能のうえで重層的に働くための空間構成をとっている．

すでに述べた如く，遠州ら3者の関係は，直接あるいは間接に，いわゆる師弟の関係にあるといえるものであり，ここに取りあげた3例についてみるとき，先師が創出した造形手法を踏まえ乍らも，一面においてそれぞれに工夫が加えられ，それぞれに独自の空間構成を実現したといってよいであろう．

而して，それは，これら3者の露地に対する対応のちがいに由来すること勿論であるが，より重要な点は，それぞれがもつ書院座敷の庭に対する理念の相違にかかわる点であろう．この点については書院座敷の庭を軸とし，稿を改めて検討する予定である．

5. 摘　要

この論文では，片桐石州，松平不昧の茶室と露地の特性について検討した．石州のそれについては特に，彼が晩年創建した慈光院に好んだ二畳台目茶室と露地および書院座敷とその庭がもつ空間構成の特性について吟味し，露地と書院の庭の出会いと連らなりに関わる背景と特質について考察した．

石州の茶の流れを汲む不昧が，寛政4年に好んだと伝えられる菅田山荘の茶室・菅田庵とその露地，および向月亭とその庭の特性について吟味し，特に書院の庭のもつ特性が菅田庵の露地との自ずからなる連繋をつくり出すことについて考察した．

さらに，慈光院の庭と菅田山荘の庭がもつ空間構成の特性の系譜について，遠州の創造した忘筌の露地を含めて検討し，これらの露地がもつ意味とその空間構成の展開には互いに深いかかわりのあることを指摘した．

引用ならびに参考文献

1）浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎（1988）わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察―その5：鎖の間について，千葉大園学報41，67-74.
2）浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎（1986）同上―その3：遠州における継承と創造，同上38，59-68.
3）浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎（1988）書院造庭園に関する研究―その1：初期書院造庭園と会所・泉殿の庭園―，同上41，75-83.
4）堀口捨己(1969)茶室研究，東京，鹿島研究所出版会，691.
5）桑田忠親（1980）桑田忠親著作集第10巻，東京，秋田書店，210.
6）永島福太郎(1977)松屋会記，茶道古典全集第9巻，京都，淡交社，289-291.
7）中村昌生（1968）茶の建築，京都，河原書店，297.
8）堀口捨己（1969）前出，675.
9）浅野ら（1988）前出，61-68.
10）中村昌生（1968）前出，302.
11）永島福太郎（1977）前出，378-386.
12）堀口捨己（1969）前出，624.
13）堀口捨己（1969）前出，657.
14）浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎（1988）書院造庭園の鉢前構成に関する一考察，造雑51（5），3.

15) 浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎 (1985) わび茶と露地 (茶庭)の変遷に関する史的考察―その1：織部から遠州へ，千葉大園学報36，112.
16) 本庄宗益 (1987) 石州好みの茶道具，白峰社編，片桐石州の茶，東京，講談社，101-103.
17) 高林庵様伝記 (堀口蔵)，堀口捨己 (1968) 草庭，東京，筑摩書房，190-191.
18) 中村昌生 (1968) 前出，311.
19) 中村昌生 (1968) 前出，312.
20) 堀口捨己 (1968) 草庭，東京，筑摩書房，228
21) 堀口捨己 (1968) 前出，226.
22) 浅野ら (1985) 前出，112.
23) 中村昌生 (1968) 茶の建築，314.
24) 中村昌生 (1971) 茶匠と建築，231-232.
25) 中村昌生 (1971) 前出，232.
26) 中村昌生 (1968) 茶の建築，323.
27) 熊倉功夫 (1985) 茶の湯，東京，教育社，116.
28) 熊倉功夫 (1985) 前出，114.
29) 山東京伝(1802)賢愚漆銭湯新話，11～12丁，国立国会図書館蔵.
30) 中村昌生 (1968) 前出，327.
31) 浅野ら (1985) 前出，117-118.
32) 中村昌生 (1968) 前出，328.
33) 中村昌生 (1968) 前出，329.